

北支

出征勞苦體驗記

岡山県 河原導夫

少年のころおそわった歴史授業で、幾多の戦争記録を学んだ。征服者、被征服者の闘争のくりかえしが人類の歴史であり、戦争が如何に悲惨なものか知らされていた。

満二十歳、甲種合格、北支派遣百十師団百十連隊に現地入隊した。昭和十七年十月一日連隊本部のある河北省易県城内で連隊長・黒須源助大佐は、千百人の現役初年兵に大きな声で馬上から「諸子の入隊を歓迎する。しかし予はここでは諸子の命をもらう。男子のほまれをまっ

とうして、皆の軍旗のもとで死んでくれ。連隊長は諸子の玉砕を期待するものである。」この訓示はまさに死刑の宣告でありました。師団長・林吉太郎中将が、みずから作詞した「忠魂光る湊川、孤忠に輝く船坂山、大義に生きる船坂に、父祖の血潮を皆受けて、一せい玉砕國護る、見よや尽忠驚兵団」の軍歌を毎日連唱させられた。

内地で極秘的に予想された大東亜戦争に、日本政府ががしんしょうたんの決着をもとめた。手段は上海事変で、久留米連隊の爆弾三勇士のごとく、疲れ果てた職業軍人にかわって、未成年男子を一銭五厘の赤紙で召集して肉弾化を想定していた。

現地入隊は同時に、戦闘訓練の猛練習が日夜続きます。百姓そだちで大麦飯を十分食ってそだった初年兵は、金の茶碗一杯の盛飯は、食後すぐ腹がすきますが、

それ以外に一粒のおやつとてあたえられず、空腹をしのぎ古兵の残した残飯を犬畜生同様にあさり、我慢の連続でありました。夜、炊事のこげ飯や黒砂糖の固まりをぬすむ等、ずいぶん飢えには苦労しました。

猛訓練中、歩哨中の同年兵上井二等兵はわずか入隊一か月目に八路兵にうたれ戦死しました。私は津山市出身の土井二等兵の死体を徹夜で通夜し、生まれてはじめてだびにふし、白木の箱につめて白布に包み、私の首につるして連隊本部に届けました。いつか自分も土井同様「磷酸カルシウム」になることの覚悟をしました。二度とふたたび祖国へ帰れることなど夢にも信じられない毎日でした。

訓練は三八式歩兵銃に五発の実弾をこめ、背中に九十発、両方の腰の帯革に六十発の実弾、それに二発の手榴弾、背囊は三十キロあります。足のずりこむいばらの生えた大陸の曠野の戦闘訓練は、実に地獄以上でした。夜は銃、軍靴、衣服の手入れ不十分と古兵に指摘され、なぐられる。頬へピンタ、さらに蹴られる者等続出、いつその兵長を殺して自分も死のうかとなんども思いました。

た。軍靴の手入れがすむと、翌日きまつて古兵が講堂に六尺机を一メートル間隔に並べてうぐいすの谷渡り「ホウケキョ」といってとばせました。

銃の手入れが悪いものは、三八式歩兵銃に着剣して「捧げ銃」をさせて膝をなかばまげと号令します。そして「三八式歩兵銃殿、自分は大行山脈の風にふかれてモサットしていて、あなたの手入れをおこたりました。許してください」と十遍、五十遍といわないいともとにしてくれません。衣服の洗濯が悪かった十人は、昼の休みの時間に全員丸裸にさせられ、南洋の土人のおどりをさせられました。このときは週番士官が通りかかって兵長はしかられました。

士官は兵長に、歩兵操典の兵営生活の一項の暗唱を命じましたが、忘れた兵長は答えられませんでした。その後その兵長はこうたいさせられて、どこかの戦場で戦死しました。

昭和十九年にはいると、つぎからつぎへと内地から現役の十九歳、二十歳の若い初年兵が入隊しました。自分たちは明日の命のないお互いの心境をわかち、初年兵に

対し暴力的制裁はしませんでした。

三月十日の陸軍記念日の朝、百十連隊は洛陽の北側、河北省黄河河岸に集結して木の舟に乗りました。夜中の黄河濁流の岸を出た木舟は、五キロ下流の対岸に到達します。適前上陸でありました。夜が明けると彼我の野砲、重砲が一斉に火を吹き、物凄い轟音で耳に脱脂綿を詰めました。十センチ先も自分の振る手の先もまったくみえない。硝煙にとじこめられた白兵戦に無我夢中の突撃をかんこうしました。

六中隊の小隊長の二人は真っ赤な鮮血を吹き出して戦死しました。屍を見届ける間もまったくありません。高地にある敵のトーチカ陣地へ我おくれじと突入して占領しました。それから洛陽まで五十キロを敗走する敵を追ひ、また待ちかまえる敵と対戦しつつ、攻撃また攻撃の前進でありました。六中隊に入隊当時の戦友五十人は僅か五、六人しかおりませんでした。戦死したのか、転属したのか、戦争の消耗品となっていく自分たちの同年兵はあわれであります。後続未教育の二等、一等兵が勇敢にも先頭になって突撃しました。戦死する者、負傷する

者、日本の軍隊は若いものから順番に一番危険な戦闘を切り開いてくれます。

やっと六月半ば過ぎて集結した。戦闘後の平和な洛陽市街に駐屯しました。食糧は不足して毎日が空腹の生活でした。いよいよ大東亜戦争末期の二十年三月、河南では川岸の柳がわづか一センチくらい青い芽を出したころ、死出のかどである赤飯を腹一杯食べて、百キロ西方の米軍の内地空襲B 29の待機する老河口飛行場を壊滅奪取作戦に出発しました。毎日のごとく、この飛行場をとびたつて日本へ向かう何十機かのB 29米爆撃機は高度六千メートル以上で、わが軍の高射砲のたまはまったく敵機にとどかない。

高射砲弾がさく列する煙はB 29の下空で到達にほど遠い。もうそろそろ日本では新高射砲が出来て、それがとどいたらB 29は全部撃ち落とせるという上司からでたデマをなけば信じ、我慢した。しかし内地は、焼け野が原となり大砲の製造どころではない。自分たちは夜間駐留する敵飛行場のB 29のエンジンのおおいに穴をあけ、灯油とガソリンをそそいで焼く作戦が始まった。敵は日本

軍の進行を予想して川の橋全部をこわしていた。

米空軍の制空権のなかを真夜中の百キロをこす道を、さらに軍服のまま川の中で戦友とかたく手をつなぎ、装具を頭上において渡河しつつ前進しました。目的の老河口の米飛行場は、にわかには厚い鉄板を敷き始め、滑走路全体が鉄の広場でありました。

さいわい灯油とガソリンを流した。兵隊は火の玉のなかで五十機のB29をことごとく焼きはらうことが出来た。誰が何人やいたか、戦死したか、むらがつて攻撃してくる米戦闘機に近づくことは到底できませんでした。蒋介石と米連合軍の日本空襲の作戦をしゃだんすることが出来ましたが、僅か五キロ西方の古城・峡口は蒋介石が日本民族全部を殺すための原子爆弾製造材料岩塩百万屯と大量の軍需物質がたいせきされている。この古城は縦一千メートル、横五百メートル、焼き煉瓦で築いた二重三重の城壁の高さは十メートル、の堅城です。しかも西安から支那の名将胡宗南大将の指揮する兵、百十師団の十五倍の十五個師団がうちとそとからまもっています。

自分たちは臥手山麓のあいろを確保して、その日から半年間、この大軍と悪戦苦闘しました。敵の捕獲兵器まで用いる戦争でした。わが軍は、この間四千人の死傷者を出して占領した。敵の軍需物資岩塩全部をだつしゅうしました。

戦況がかわり百十師団の精銳は対ソ、対米作戦に急転直下転用されることになって、この地を離れ元駐屯地・洛陽へ引揚げることになりました。行軍中また状況は急変し、途中の小さな支那部落で運命の終戦の日を知り、らくたんしました。

この半年間の大決戦で百三十九連隊、兵庫連隊は師団の犠牲者の二分の一の二千人の戦死傷者を出した。自分たちより一か月近く以前に百三十九連隊は満州の対ソ戦に出発していた。満州でソ連軍に抑留されていた下枝連隊長はソ連の地で戦後すぐ亡くなられた。

敗戦の翌日からの行軍のなかには、小さな支那部落の住民でも、日本軍をみて罵声をかけてきました。

昨日まで戦っていた戦勝国中国兵の堂々たる行進と日本軍がまざることとなりました。一方は日本軍の武装解

除に向かう戦勝軍であります。大きな川を渡るときは日本軍と中国軍は昨日の敵は今も友、呉越同舟のことがありました。一人の日本語をよく話す中国軍の将校が、自分たち若い兵隊に声をかけてくれました。

西峽口の攻防戦で若い兵隊の君達が実に勇敢に戦ったことをほめてくれて感激しました。中国軍は私たち侵攻で日本軍の五倍も十倍もの犠牲を出していることを考えると、初年兵の胸はつまる思いがしました。洛陽の駐屯地に着き武装解除を中国兵から受けて、翌年三月まで、この地で捕虜生活をしました。

蒋介石から私たち若い精鋭の兵隊に対し、中国再建のため中共作戦に使用しようとする誘いがありました。しかし、しばらくして連合国のポツダム宣言の主旨から、これを蒋介石はあきらめざるをえず、私たちは全員復員することになりました。

やっと無事に復員しました。亡くなった戦友には気の毒でしたが、平和になって晴れて先祖伝来の平和産業である百姓ができることは幸福でした。

長城線に戦って

愛知県 天野 章 一

私は昭和十八年一月八日、周囲四、五キロの真冬の篠島からただ一人、前浜で島民の皆様に送られ、関東軍の一兵士として出発しました。家は貧しい漁業で一家は祖母父母両親弟妹で十人でした。私が入営したら後の生活は、幼い弟妹のめんどうはと、本心に心配でした。

名古屋に伯父・伯母がいて一泊、松江市内の八束町というところに父と弟に送られ入隊しました。

当時、島では雪などみたくもないのが、松江に入隊したらとつぜんの寒さ、毎日雪か雨で夕方演習終了後、古参兵の下着、靴等の洗濯と掃除に頑張りました。本当に風邪などひくひまもなく、お国のためとつらい毎日でした。

夜の一品検査、兵器の検査等少しでも落度があれば、スリッパ(皮)でなぐられ、消灯ラップでようやく寝か